第２４回森吉山麓高原自然再生協議会　議事録概要

（１）令和元年度モニタリング調査の結果について

星崎委員
　斜め植えは、生育的にはいいんでしょうか。

和田委員
　初期段階ではいいです。ただ徐々に徐々に雪害が見え始めてきているという段階です。

星崎委員
　これだけの成長であれば、斜め植えは成功していると言った方がいいのではないでしょうか。

青木委員
　ウサギ獣害で、被害が主軸から樹皮に向かっているようですが、現実に枯死だとか成長阻害とかのデータは出ているんでしょうか。それともあんまり、枯死等には影響しない、ただ食べられてるという状態なんでしょうか。

和田委員
　いや、場合によっては枯れることもあります。周囲一周やられてしまうと。それで、ウサギはある程度太さがあるとかじれなくなるらしいんですよ。１ｃｍくらいですかね。そういうことが影響していると思うんですけれども。

星崎委員
　NO2のグラフですが、六日町のデータだけが随分NO2が多いんですけれども、これは特殊な場所なんでしょうか。
和田委員
　説明を省略してしまったんですけれども、簡単に言えば、いわゆる街です。六日町だけが町で測っていて、それ以外は全て山奥ということですね。それで、上に記載のオゾンとNO2というのは反応し合うそうなんですよ。
　ですからこれはセットで測らなければいけないそうで､六日町のオゾンは見た目では少ないんですけれども、これはNO2といわゆる食う食われるの関係にあって、六日町のオゾンが一番低いというのは見かけだけで、実際はもっと高いということらしいです。

星崎委員
　このNO2の主因は、車ですか。

和田委員。
　はい。人間が起源の、車ですとか、工場の排煙ですとか。

蒔田会長
　後半のモニタリングサイトはブナの低木が非常に多いですが、これはみんな伐採でしょうか。

和田委員
　中静先生なんかの報告を読むと、そういう感じですね。この場所もやっぱり放牧した形跡があります。多少なりとも影響はあると思います。

星崎委員
　牧場があった当時に放牧していたのでしょうか。もっと前の話でしょうか。

和田委員
　中静先生の先生の論文を見ると、かなり前から林内放牧はされていたみたいですし、最近についても、放牧なのか逃げてきたのかは分かりませんが、そういった形跡はあります。

金澤委員
　元々ノロ牧場作る前に林内放牧がずっとされていたはずなんですよ。平坦地のブナ林のところは大体そうなんです。

（２）令和元年度実績について

蒔田会長
　山火事の原因は分かるのでしょうか。

池田主幹
　はっきりとしたことは分かりませんが、タバコかクマよけの爆竹が着火したのではないかといううわさはあります。
　ちょうどタケノコのとれるシーズンですし、結構人が入っていたようです。

星崎委員
　山火事は夏に発生したということですが、植えたのはいつごろでしょうか。

池田主幹
　植えたのは、実際には10月に入ってからです。

蒔田会長
　燃えた苗木は全部枯れてしまったのでしょうか？

池田主幹
　全て枯れてしまったかは判断できませんが、大きい木は残しながら満遍なく植えました。

蒔田会長
　資料の左上の写真はまだ燃え始めたところで、この倍くらい、全体が燃えたということでしょうか。

村田委員
　このエリア全体が燃えたということですね。

佐藤主事
　そうですね。左上の写真は発生時と書いてしまっているんですけれども、今まさに延焼が広がっている時の状況になりますので、実際に燃えた範囲というのはもう少し大きいものになっています。

星崎委員
　ここは和田委員が実施しているモニタリングの地点なのでしょうか。

和田委員
　いや、違います。

星崎委員
　どのくらい燃えたのでしょうか。焼畑と同じで、このくらいの燃え方だと、それなりに畑に肥料がまかれたのと同じような効果があるのではないかと思われるのですが。

池田主幹
　資料の下の方にも書いてあるのですが、青木委員と林業研究研修センター、それから福森委員にご同行願いまして、相談したところ、復旧するのが一番いいだろうという指導を受けまして、実施した形です。

青木委員
　以前植えた木は大半枯れて、逆に実生の木の方が焼け残っている感じですね。
　木が燃えたというよりはススキがよく燃えたので、それに耐えられない高さの木は全て燃え、多少頭が抜けたような木は残ったような状態ですね。

和田委員
　はい。

和田委員
　ただ、直後の写真と夏に行った時の写真はだいぶ違っているということで。

池田主幹
　そうですね。直後は何もないような状態で、草もいつ生えるのかと思ったんですけれども、一か月もしないうちにススキが腰くらいまでになったというところです。

（３）令和２年度計画について

村田委員
　あくまで希望ですが、今までの環境学習は、他の団体におんぶにだっこの事業ばかりだったので、協議会が主体となっての環境学習など検討してみてはどうでしょうか。
　なかなか難しいとは思いますが､野生鳥獣センターやブナ林再生応援隊のイベントとの抱き合わせではなく、協議会委員が主体となって現地で行うようなイベントがあってもよいのではと思います。

菅原班長
　そういうものがあるとすれば、日程等合わせて、皆さんに照会をかけるなどして、参加者を募るということは可能だと思います。
　ただ時間的に、午前中現地調査して、午後協議をするとすれば、なかなかイベントと合わせるというのは、大変密な時間構成の中でやっていかなければならないというのは多少あるかなと思います。
　最初から無理という考え方は示さないで、色々やれることがないかなというのは検討させていただきたいと思います。

村田委員
　確かに机の上でいろいろ検討してやってもらうというのも1つの案かもしれませんけれども、野鳥観察会も樹木観察会も、鳥獣センターの事業にぶら下がってるので、また100年後の森づくりも、ここの委員であった人たちが、自分たちもやろうということで、森吉山ブナ林再生応援隊（森援隊）という別の組織を作ってやっているという形ですので。
　この協議会も年１回しかやっていないような状態なので、実際に現地で動くようなものがあればと。

菅原班長
　事業の最初のころは予算もあったので、活発な活動ができていたということはあります。
　公務員のところというのは、どうしても３、４年程度で異動もあるということで、内容が手薄になっているという状況もあるのではないかと感じています。
　来年度についてですけれども、この間北秋田市長が、森吉を中心とした形で、環境についての勉強会なり、地域を主体とした観光について、強力に進めていきたいという気持ちを出しています。
　新聞等にも出ておりますので、それらの方針の中身も加味しながら、協力・連携できるものはないか、情報交換しながら進めていきたいという考え方はもっております。
　ただ、まだ具体的な方針は見えていないので、今回のこの場では、内容については出さなかったというところがります。

蒔田会長
　森援隊は何年くらい前に結成されたのでしょうか。

村田委員
　10年くらい前ですね。

蒔田会長
　そういう形で、協議会の中の方が団体を立ち上げて、こういう事業に参加して活動されているという状況ですね。

村田委員
　ただ森援隊も皆さんの会費だけでもっているような状態ですので。
　だから色んなところから、企業さんだとかからお金をいただいたりということがないと、なかなか動けないですし、あとは終わってしまったんですけど、環境省さんから周りの土地に手をかけてもらえればということで少しお金をいただいたりですね。
　手弁当ですけど交通費とか、苗木とかそういうものにお金がかかるという状態ですね。

蒔田会長
　協議会自体はなかなか動けていないので、そういう団体の活動は協議会の中に位置づけて、もっと情報を共有しながら進めていくということもあるのではないかと。

青木委員
　この再生協議会というのが、法律に基づくある程度定められた事項の関係者で協議するという会議なので、そこが事業を何か主体的にやっていくというのは、県予算もほとんどないような状態なので、難しい性格の団体だと思うんです。
　だから、委員の方々がおっしゃったようなことをどのようやっていくかということについては、県の行政体としての自然保護課は、私がやっていたころと違って予算も大分減らされているので、何もできない状態では

ないかという危惧はあるんですが、そういう場としてここを活用するとか。お金がないなら人を出すとか、そういう形でもいいので、協力するということは考えてもいいし、第４期の計画に盛り込むという手法は１つあるかもしれないと思います。

蒔田会長
　当初のようにちゃんと予算がついてれば色々とできるんですけれども、今みたいに予算がつかない状態で協議だけ必要だといっても、実効性が担保されないじゃないですか。何も成果が出てこない状態になっているんじゃないかと。
　だから当初の縛りで考えてしまうとしんどいのではないかと。

村田委員
　市の方でも、そういう自然環境的なことをやっていきたいという意向があるのであれば、例えば学校の行事の中で、色んな体験の時間があるので、そういうものの一環として、例えば１年生が、遊びながらどんぐりを拾いに行って、クラフトしようとか、そういうことから始まってもいいんじゃないかとは思いますし、それから６年生であれば木を植えようとかっていう循環で、市の方にも携わっていただいて、それに対してこの協議会も協力しますという、そういうこともあってもいいのかなとは思います。情報がないのでわからないのですけど。

菅原班長
　我々も同じような状態で、私も今お話したのは、今の議会の関係でそういう話があったというところですので、実際にどういうことをやっていくのかということはこれからだと思うので、具体的なことは、これから検討することになるのかなと。
　地元の市の方でこれからそういう対応をしようという考えがあるのであれば、我々もアクションをかけながらいろいろな関係性をもっていけるのではないかと思っているところです。

金澤委員
　小学校とかでもそういう環境学習というのはやっておりますので、そういったものの場として森吉山を用いるというのは、即答はできませんが可能かなとは考えております。

蒔田会長
　予算的に厳しいというのはどこも同じ状況と思いますので、その中でそれぞれができるところを少しずつ出し合って、協力し合わないと動かないんだろうなとは思います。
　第４期になって事業計画作ったとしても、予算的には用意されているわけではないので、県の森づくり税かくほできるのかなど考えていかなければならないということで、その中での協力体制を作っていくことが必要だろうと。
　相手の動きを待っていても進まないというところもあるので、県の方で積極的に声掛けをしていく必要もあるのではないかなと思います。

菅原班長
　来年度以降そういうこともやっていきたいなと思っているが、本来この会は会員それぞれが主体的になるべきものと思うので、県の方でも、自然保護課だけではなく、同じく委員になっている森林整備課や地域振興局等とも連携をとり、地元が中心になってやっていければいいんではないかなと思っています。

蒔田会長
　協議会の名前を積極的に使っていくのがいいんじゃないかなと思います。何か行うときに会長が必要ということであれば、協力もしたいと思います。

菅原班長
　よろしくお願いいたします。

青木委員
　国の森林環境税が動き出しているようで、あれはかなり柔軟に使えると聞いたんですが、例えば県が所有している森吉の維持管理の予算項目に付加するというのはできるのでしょうか。

花田委員
　県の森林環境税は市町村の支援がメインとなっているので、県が独自に所有する森林に使うのは難しいかとは思います。

金澤委員
　使途として不可ということではないと思うので、検討できればとは思います。

星崎委員
　各所が独自に予算を作る前に、協議会ほか横のつながりはほしいかなと思います。予算が決まってからでは、協議してもできることは限られるかなと思うので。
　第４期からそれを始めるというのはどうかなと。

蒔田会長
　９月にも協議会が予定されているということなので、それまでに各自、予算含めて考えていくということでよろしいでしょうか。

（４）第４期計画について

和田委員
　星崎委員のお話のとおり、計画書出来てからだとなかなか動けないという面がある。やっぱり作る段階である程度煮詰めておかないと、実効性というものが伴っていきませんので、その辺はやっぱりスタートが重要かなと思います。
　それから委員についても、来年度いっぱいで替わると思うんですけれども、森吉山麓高原自然再生事業は、他の協議会の多くと異なり県が実施者ということで、県の課所とのネットワークは作りやすいと思うので、例えば振興局とか教育とか、そういったところを引き込み等できないのかなと。そういったところも入っていれば、情報収集等もスムーズにいくのかなと思います。
　それからモニタリングですけれども、範囲等区切って広いエリアを確認する必要があるのではないかなと。点のデータではなくて、全体として広い目で、森林全体としての状況を見る必要があるのかなと思います。

蒔田会長
　そういったデータがあって計画を立てられればいいんですけれども、なかなかそれは厳しそうだなと。
　そういうことはやらないといけないとは思いますね。この事業の可能性というのを示すことが必要なので、そういう面でもそういった全体像というのは必要ですね。
　具体的な事業内容として、ハード事業というのはどれくらい必要だと思いますか。

和田委員
　先程話になった全体像がつかめないと何とも言えないとは思いますが、やっぱり予算ですね。やっぱりそこがないと。予算を考えずに言えば、苗木もありますしできないことはないと思いますが。

蒔田会長
　逆に言えば、今まで植えたところが順調に育ったとして、それでＯＫとするかどうかというところですね。

和田委員
　その辺のゴールをどこに置くかというところが難しいので、何とも言い難いところですが。

青木委員
　国や県の税が使えるとしてですが、既に事業を実施した場所でもササ等で再生困難なところがあれば、そこに再導入するなどというのが、行政ではやりやすいのではないかと思います。手を加えた場所でも、今改めて手を打てる場所と、その方法論があれば着手するという。
　そういうことでもやらないと、この事業が尻すぼみになっていくのではないかという危惧はあります。

福森委員
　植えるというのであれば、苗木の供給とかから、５年の計画はもちろんですけど、１０年１５年の長期計画もあった方がいいかなと。
　正直な気持ちとしては、この第３期計画は、予算が足りないということで傍観していた印象があります。
　果たして人が来て欲しいのか、来てほしくないのか。来て欲しいというのであれば、もっと分かりやすいＰＲをするべきかなとは思います。事業地に入ったところに看板などもありますけど。

村田委員
　最初は子供の環境教育のための森にしようということで、あそこに看板を立てたんですね。

福森委員
　そういう分かりやすいＰＲをやって、そういうことをやっているんだっていうことが分かれば。そういう分かりやすいＰＲのしかたっていうのは、今後山を保護したり、利用したりするうえでの、利用のしかたの啓発という意味でもいいのかなと。その辺りも第４期計画に盛り込めればいいのかなと思います。

和田委員
　やっぱり活動を見せる場っていうものが欲しいですね。看板もそうですけど、それに限らず、実際にこういうことをしてますというのを、人を連れてきて見せられるような場というのを作った方が効果的ではないかと思います。
　あとは試験研究的な立場からになりますけど、ブナの天然下種更新っていうのをやってみたいという気持ちはあります。当然予算は伴うんですけど、あのエリアの中でできればと。当初の計画にはその補助作業というのもあったはずなんですが、なかなか役所が事業を発注するというのは、いわゆる積算という行為をするんですけど、だからそれが難しい。事業主体が県だからむしろやりにくいという面があるんですね。

村田委員
　そうですね。例えば地域の老人クラブのような、退職されてるけれど元気のいい人、そういった方たちに声をかけると、子供たちに見せたいということでススキの仮払いなどやってくれるんですけれども、県がそういうところに事業を発注するというのは難しいと言われまして。
　それで民間でということで、振興局さんにお願いして、そういうお金を少しもらったんですけど、それもあまり出せないということで。なかなか県の方だけでは難しいのではないかなと。

菅原班長
　補助事業というのも、継続してやるというのがなかなか趣旨に合わず、認めてもらうのが難しい場合が多いんですね。さっきのお話であれば、植栽や最初の保育は良いんだけれどもその後については、ということで、難儀しているところも多いということで。

蒔田会長
　そろそろ時間ではあるんですけれども、これまでのお話を伺っていて、次の計画という時には、これまでの20年近くの蓄積を活かして、１００年後の森づくりをするにはどうしたらいいのかということを、ある意味全国にない例として、提言のようなものがある、全体像みたいなものがあれば。
　そのために必要な調査ものだとか、プラスアルファで現実に生えていないところに植栽をするようなハード事業や、それを周知するような環境教育的なソフト事業の組み合わせになるのかなとは思いました。
　そういった方向でいくこととして、その辺りを９月の協議会までに皆さん考えていただければと思いますので、ご協力をお願いします。

終了